

しあわせな時

講師：中川 李枝子



読書に関する話をするようにと声をかけていただきますと元気が出ます。今まで読んできたたくさんの本が私の背中を押してくれるような気がするのです。私の手元には角が丸くなってしまった本やページが黄ばんでしまって活字が埋没しているような本、ページがばらばらになりかけた本もあります。誰かに貸してしまって所在が思い出せない本もありますし、この本良いなと思って買っているがまだ読んでいない本も一山あります。本が背中を押してくれるというのは、私にとって豊かな気分させてくれるということなのです。

私にとって図書館は宝の山です。幽霊になったら図書館に住み着こうと思っています。だから死ぬのはあまりこわくない。今からどこの図書館にしようか考えています。

本を「読むしあわせ」と「読めるしあわせ」、その2つは私にとってたいへんなしあわせです。きっとみなさんも同じだと思います。私の育った時代は「見ざる言わざる聞かざる」まわりを見渡すと「欲しがりません。勝つまでは」「贅沢は敵」のようにどちらを見てもスローガンだらけでした。だから私は今でもスローガンやキャッチフレーズを好きになれま

せん。戦争の頃は「きれい」「うれしい」「さびしい」という形容詞も贅沢の中に入っていたのではないかと思います。「贅沢は敵」といわれても物質的な贅沢を知らないで育っておりますので、贅沢は感覚的な豊かさと思っていました。戦争中飢えていたのが、戦争が終わって自由に本を読めるようになった、この感激が今もずっと続いています。ですから「本を読めるって本当にすばらしい、ありがたい」という思いが、私たちの世代は深いのではないのでしょうか。

子どもの頃から10代20代30代、ついには70代にまでなってしまいましたが、ずっと本を夢中で読んできました。若い頃は疲れ知らずで本当にしあわせだったと今にして思います。本を読むのは若いうち、体力のあるうちよ、と言いたいです。楽しみは老後にとっておこうという方もいますが、それはもったいない。若い頃は感性が豊かで、頭の先から足の先までみずみずしかったと思うのです。反射神経も鋭いし、好奇心も旺盛だし、冒険心もあるし、世の中は発見と驚きでいっぱいでした。世間を知らないということは、何か1つ読むたびに賢くなった自信と充実感を得ました。読んだ本が血となり肉となる手ごたえを感じました。『モンテ・クリスト伯』を読んだ時の興奮は、いまだに忘れられません。疲れ知らずのエネルギーというのは、青春の象徴ではないか。それは傍から強制されるものではなく、自分で獲得する喜びだったと思います。最近「読書推進法」など「本を読め」と子どもたちを叱咤激励して読ませようとする試みがあり、それも悪くはないのですが、私の場合は読みたかったら自分で調達しなければならず、何か面白い本はないかと四六時中探していました。おかげで、よそのお宅にいくと本のある場所を嗅ぎつけるような嗅覚が身につきました。

読んで期待はずれだったり、内容がさっぱりわからなくて面白くなくてがっかりした経

験もありますが、無駄にはなりませんでした。失敗しながら、今読みたい本を選ぶ力を獲得していったような気がします。本を読むには、作者と同じくらいエネルギーが必要だと言われますが、それくらいエネルギーをたくわえて本に向かわなければならないということでしょう。読書というのは、誰にも気を使わないで私だけの世界にひたる、あくまで個人の楽しみだと思えます。本人が読みたい思いをもって本にぶつかっていく、他人がいても眼中になく自分の世界にはまりこんでしまう、実にしあわせな時だと思えます。また、読書というのは自分と向き合う、自分を客観的にみるチャンスだと思えます。物語の主人公と一体化して心の体験をともにする、その自分をもう一人の自分が見ているのです。これは、自分を解放することでもあります。悩みや迷いなど人生の苦しみを軽くしてくれるのではないか。文字を読めない子どもでも、耳から聞くお話によっていろいろな目にあって喜びや悲しみを感じ、波乱万丈の経験をするのを味わえると思えます。

浦和といえば石井桃子さん、桃子さんもたいへん本がお好きな方で、お会いすると「このごろ何か面白い本を読みましたか」が、私たちの共通の話題となりました。

『デイヴィッド・コパフィールド』(岩波書店)が面白かったので、石井さんにもおすすめしたら「面白かった。たっぷり楽しめた。」とおよろこびでした。石塚裕子さんの訳がとても良く、複雑な人間関係が書き分けられ、会話が続けても誰のせりふかきちんとわかり、感心しました。

赤沢威著の『ネアンデルタール・ミッション』(岩波書店)は学術的な本でしたが、この本も石井さんが面白がられ「私もほしいわ」と言われたのですが、絶版になっていたので私のをさしあげてしまいました。これは、石井さんが最後に気に入ってくださった本です。

石井さんは夏目漱石を大変尊敬していらっ

しゃいました。『漱石文明論集』(岩波文庫)の「私の個人主義」はご存知なかったのですが、たいへん関心をもってくださいました。朗読テープも発行されたので、私たちは繰り返し聞いて楽しみました。私たちは本を通してしあわせな時をたくさんもちました。

ここで私から最近おすすめの本を3冊紹介いたします。

1冊目は岩波新書『ルポ貧困大国アメリカ』です。ルポルタージュです。堤未果さんが自分の足で歩き、見て聞いて書かれたものです。サブプライムローンなどの問題が起きた時でしたので、私も興味を持って読みました。何もかもが金次第という国の恐ろしさ、マネー社会のこわさがよくわかりました。格差社会、戦争が商売になっている国、日本はアメリカの後を追いかけていく状態にありますから、頭を冷やさなくてはいけないと思いました。ジャーナリズムの後退についてもきちんと書かれていて、彼女を応援するつもりと他の人にも読んでもらいたくて10冊ぐらい買いました。

2冊目は『親愛なるブリードさま』。柏書房から出ている本です。強制収容所に収容された日系2世と市立図書館児童室担当だった司書クララ・ブリードさんの物語です。戦争がはじまり、日系アメリカ人の子どもたちが家族と収容所に入れられる時、ブリードさんは駅まで見送りに行き、子どもたちにブリードさんの宛名を書いて切手を貼ったハガキを手渡し、居場所を知らせてくれれば本を送ってあげるといいます。子どもたちもブリードさんも約束を果たしました。子どもたちの手紙は250通ほどになり全米日系人博物館に残っています。これに感銘を受けたジョアンヌ・オッペンハイムさんが、当時の子どもたちにインタビューをし、公文書の調査など資料をそろえた上で書き上げたのがこの本です。

もう1冊面白い本がありまして『オタバリの少年探偵たち』(セシル・デイ・ルイス 岩

波少年文庫)です。瀬田貞二さんの訳で出ていましたが、今度は脇明子さんの新訳が出版されました。第二次世界大戦後、イギリスのオタバリという小さな町で起きた出来事を書いたものです。オタバリという町はナチスの攻撃を受けたので、両親をなくした男の子も出てきます。世の中はまだ混沌としていて、少年達は3年生か4年生、2つのグループに分かれて戦争ごっこに夢中です。そこに本物の敵が現れました。AとBに分かれていたチームが「オタバリ講和条約」を結んで一致団結して敵に向かって行って、最後に勝利するという本です。瀬田さんの訳もよかったのですが、今回、訳した脇さん自身が楽しんでらっしゃいましたので、ぜひ読まなくてはと読みました。本当に面白くて、どちらも優劣つけがたいです。脇さんの訳は、男の子の言葉、ガキ言葉が実にうまい。翻訳は会話の訳が難しいのですよね。

この3冊は、今日みなさんの記憶にとどめておいてほしいと思います。何しろ埼玉には図書館があるのですから。リクエストすればちゃんと買ってもらえますから、読んでください。

この世に生まれてどんな人に出会うかどんな本に出会うかが人生の決め手になるのではないかと思います。いい人に出会って、いい本に出会って楽しい人生を送ってほしいと願っています。最近はいやな事件が多くて、生まれて最初に出会うお母さんに殺されてしまうとはいったいどういうことなのかと思います。1番最初に出会う人であるお母さんにしっかり愛されることによって信頼関係が養われ、人生が滑り出すのですから。成長によって人の和が広がり、人が人によって人になり、人生が豊かになるのです。少年少女の非行は人間関係のもつれから起こる、人間関係がうまくいってれば問題はおこらないと思います。人間関係は家族から始まって、周りに広がっていく、人とのふれあいを大切にきちん

としていかないと将来不幸なことになりかねないと思います。他人の生き方や感じ方に関心を持つことで自分の内面が豊かに成長する、また自分で気づけなかったことが見えてくる、そのあたりが本の生命力ではないかと思いません。

私が保育園で仕事をしていた時、なぜ本を読んだりお話をしたかという、子どもが喜ぶからです。子どもは喜ぶととてもかわいいのです。子どもの喜ぶ顔を見るのが私のしあわせでしたから、もっと喜ばせたいといろいろな本を読んだりお話をしました。それが文学修行になりました。子どもたちが大好きな『ちびくろサンボ』のトラのバターより、おいしいカステラをうちの保育園の子たちに食べさせたいと考えて『ぐりとぐら』が生まれました。今では世界中の子どもたちに読まれてうれしいです。本のきれいな子は一人もいませんでした。私は、毎日何か面白い本はないかと探していました。よそのお父さんを預かるプロとしては、みんなに楽しんでもらえなければ失格です。本が好きとか嫌いとかは子どもにとって理屈ではないですね。誰かが本を読んでもくれるというのは、うれしいことです。子どもの想像力やお母さんの想像力で物語が広がっていきます。小さい子どもでも子どもは賢いですから、次はどうなるかとわくわくする話の方が好き。「本はいいものだ、幸せだ。」と子どもの中にインプットされれば、自分の力で本を見つけていく力が育つのに違いありません。大きくなって学校にいけば、又いろいろ本があつて、子どもは順調に育っていくと思います。私は自分の生きる道を本のおかげで見つけたと思っています。

子どもの頃、私はお話を聞くのが楽しみでした。戦争中で、他に楽しみはなかったですから。父は「かちかち山」「桃太郎」「一寸法師」の話を繰り返してしてくれました。母は家事で手一杯ですから、遊び相手は父親でした。父は、本棚が満杯になるほど本を持っ

ていました。父の本を1冊1冊片付けるのが私の遊びでした。本を買ってもらえる時代ではなかったの、本棚をあさるという遊びを覚えたのです。

最初に見つけたのが、岩波文庫の『グリム童話集』でした。子どもは字が小さくても全然苦にならないのですね。いまだに愛読書です。「子どもを本好きにしたかったらまわりに本を置いておきなさい。」「子どもに親が本を読んでいる姿を見せてやりなさい。」と言われますが、まさに私はそういう環境で育ったといえます。

私は新制中学の2期生なのですが、当時は校則もない、先生もそろわないという状況でした。ただ戦争の心配をしないということが幸せでした。「中学校には図書室を置くように」というGHQの命令のおかげで図書室があったので、岩波少年文庫の『ふたりのロッテ』と出会いました。あまりに面白かったので岩波少年文庫の虜になり、それからはほとんどのものを読みました。聞いた話ですが、岩波少年文庫が出版される時、「こんな地味な本が売れるのか」と上層部から反対があったそうです。それが日本中の新制中学校が買ってくれたおかげで出版を続けられたとのこと。後に、どこで岩波少年文庫に出会ったかアンケートを行ったところ中学校の図書室という答えが断然多かったそうです。学校の図書館の力は大きいとあらためて感じました。

どういう本を選んで置いておくかということが図書館の質の目安になると思います。良い本を選んで子どものそばに置くことが大事です。

たくさん読んだ中でこれという1冊に出会うということも読書の幸せではないでしょうか。



最後に、石井桃子さんがいつもおっしゃっていたことをお話します。

「私は、何歳でこの絵本を読むか、などというようなマニュアルにはうんざりする。だいたいこのような説を気にする人は、本をあまり好きではない。子どもの見方も上っ面ばかりで肝心のところを見落としている。そのくせ早期教育には積極的で教育産業のカモにされている。その被害者は誰かは明らかである。情報に流されないように、人と人との出会いこそが大事。」

〈質疑〉

Q 子どもに聞かれて答えられなかったのですが、どうして「ぐり」と「ぐら」という名前なのでしょう。

A お話を作るときは名前がとても大切です。どうしたら子どもが喜んでくれるのか考えると名前をつけるのにも非常に苦労します。

フランス語の絵本で、ねこたちがキャンプに行ったらテントを設営したところ、ねずみがテントの中に入ってくるのがありました。ねこたちはなんとねずみがきらいで、テントから逃げ出して木の上で震えている。ねずみたちの歌った歌が「グリツクルグラ グリツクルグラ」意味はわからないのですが、囃子歌のようです。保育園の子どもたちがそこにくると響きがよいのか大合唱をするので、「ぐり」と「ぐら」という名前をいただきました。